つくばで輝く研究者

研究室にて

ASAKA Masamitsu 浅賀 正充 さん

国立研究開発法人 医薬基盤・健康・栄養研究所
霊長類医科学研究センター　研究員　博士（医学）

福島県出身。1999年熊谷高校卒業、筑波大学第二学群生物学類入学。2003年同大学医科学研究科入学、05年同大学院人間総合科学研究科入学、09年博士（医学）修了。同院博士研究員、埼玉医科大学ゲノム医学研究センター助手を経て18年から現職。

日々の研究が紡ぎ出す「小さな達成感」大事に

《〝結果〟がくれる幸福》

実験用動物の品質管理と供給、研究リソース開発、基盤技術開発ほか先端医療技術や新薬の有効性、安全性評価などを行う施設で感染症のワクチンや治療薬の開発・効果の検討に取り組んでいる。また、現在は筑波大学との共同研究によりトマトを使っての〝食べるワクチン〟を進行中。「どんなワクチンや薬もいきなり完成するものではなく、日々の研究の積み重ねです。ほとんどが失敗だからこそ、小さいものでも結果が出た時には大いに達成感を感じられます」。

実験風景

《きっかけはO－157》

福島県福島市に生まれ、7歳からは埼玉で暮らした。生粋の理系人間で「小さい頃から答えが1つしかない理科や算数が大好き。逆に国語は嫌いでしたね」。進学先の熊谷高校は理系生徒の多くは医学部志向だったが、「ひねくれていたんで（笑）。医者を目指したことはないです」。O－157感染症が日本中を席巻した際、自身の進むべき道が見つかった気がした。「感染症の底知れぬ怖さを知りました。感染症を根本的に解決することが自分の使命のように感じました」。筑波大学では生物学類のカリキュラムである医学の研究をするコースを選択。卒業研究で〝感染生物学研究室〟に配属され、博士課程修了まで細胞に関する研究に取り組んだ。「ウイルスを知るにはまずは感染されてしまう側の細胞の基礎からしっかり学べ」と研究室では徹底的にしごかれた。ワクチンや治療薬の開発をメインに研究できている現状については「細胞をじっくり学び直したことが、今の自分につながっていると実感しています。今後は研究者として、目の前の課題に一歩ずつ根気よく立ち向かい続けたい」。

つくばの暮らし

市内で妻と2人暮らし。学生時代から通算すると、つくば市民歴は20年を超える。「大変暮らしやすい街だと思います。程よく田舎で、都心に1時間かからず行けるアクセスの良さが気に入っています」。愛妻とカフェでランチを楽しんだり、気の合う仲間と過ごす居酒屋でのひとときも貴重な息抜きになっていたが、「コロナ禍の影響で最近はご無沙汰です。のんびり過ごせる時間が早く戻ってきてほしいですね」。

2018年冬、群馬のたんばらスキー場で仲間と